

但馬の地で酪農の発展を目指して

兵庫県立但馬農業高等学校

畜産科 2年 泉山 翔平

「最後まで諦めたらあかん」これが私の父の口癖です。

私の父が酪農を営む兵庫県養父市は、神戸ビーフの素牛となる但馬牛の生産地として有名な但馬地方の南部に位置しています。

今から約30年前に、父がこの但馬の地で酪農業を始めました。地元の但馬農業高校の畜産科で学ぶ私は「お父さんは但馬牛の繁殖経営や肥育経営ではなく、なぜ酪農業を選んだのか?」とよく聞かれます。父が経営を本格的に行うまでは、祖父が乳牛8頭から乳を搾り、但馬牛1頭を主に農耕用として飼育していました。その当時、但馬牛の仔牛市が年に1度しか開催されず、但馬牛の繁殖経営をしても安定した収入が得られなかったそうです。その反面、酪農業の場合は、毎日、乳を搾ることで安定した収入を毎月得ることができます。父は、祖父の農業としての基盤を用いて、安定した収入を得るために但馬の地でこの道一筋で頑張ってきました。

しかし、現在に至るまでは大変な苦労があったと私にこのように話してくれました。「酪農経営を始めるに際して、まず牛舎の建設を考えた。じいちゃんの牛舎では、道幅がとても狭くて、飼料を運ぶにも餌屋さんが大きなトラックで運んできたものを、また小さいトラックに積み替えて運ばなければならず、とても面倒で重労働やったんや。これを解消するために広い土地へと牛舎の移設を考え、先祖から受け継いだ土地を埋め立てた。その後、自分の理想とする30頭飼育できる牛舎を建設することを計画したが、この当時、牛乳の生産調整があって増頭することが出来ず、20頭規模の牛舎に、育成牛舎、わら置き場がある牛舎を建設した。これが今の牛舎や。

資金面では、農業近代化資金を利用したので困ることはなかったが、酪農業を営む難しさや不安をこの時感じさせられた。それは、自分の土地でありながら、隣接同意書や地目変更、水利組合農会長・区長と様々な所で書類に印鑑をもらい、許可を得ることができなければ経営することができなかった。つくづく、人間関係を大切にしなければ1人では到底出来るものではないとこの時確信した。また、長い間経営を続けていこうとすれば、畜産臭気などの環境汚染などにも対応できる環境整備を整えていかなければ経営も続けることが出来ない。とにかく現在の経営に至るまでは大変な苦労があったんや。」と昔を思い出しながら私に話をしてくれてことが、今でもとても印象に残っています。また、父と一緒に元気に働いていた祖父はというと80歳を過ぎ、もう牛舎に来ることはほとんどありません。「年をとったら何もできない。そんな自分が情けない。」と祖父は私によく話をしていました。私は、父や祖父との話をきっかけに父と共に酪農業をこの但馬の地で

発展させようと考えようになっていました。

私は小さい頃から、父の酪農業の手伝いを自然としてきました。毎朝、決められた量の飼料を1頭1頭に与えています。濃厚飼料を与えてはいけない牛もいるので、とても神経を使います。また、除糞は搾乳前に必ずしておかねければならない大切な作業の1つであり、糞の状態を見ることで牛の体調の確認をし、床を綺麗にしておくことで牛が滑って倒れることを防いでいます。これらの作業をしてから学校へ登校します。校舎まで続く但農坂と呼ばれている長い坂道を上りきった頃には、もう1日が終わったように思うこともありますが、やると決めた以上は頑張りたいと思っています。

休日は、父がホイルローダーを用いて、糞尿とおが屑を混ぜ合わす作業を手伝っています。秋の稲刈りが終わると地域の和牛繁殖農家を含めた畜産農家7戸が共同し、2t当たり5,000円、作業料2,500円に時間給をいただいて、地域の畑へ堆肥散布を行い糞尿の処分をしています。また、発酵堆肥として販売もしています。

こうした作業を父と一緒にする中で「安定した収入を得るために必要なことは」と聞いてみました。父は迷わず「乳質改善と1年1産」と答えてくれました。細菌数などの成分規格の検査でペナルティが科せられないよう、乳房の洗浄、前しぼり、ディッピング、バルククラ、ミルクカーの洗浄など、毎日の管理を徹底して行うことで細菌数が減少するよう取り組んでいます。乳脂肪分などの成分は、粗飼料や濃厚飼料などの給与の方法によって変化するので、自分でさらに研究をしていきたいと考えています。また、1年1産を実現させるためにも但馬農業高校の畜産科で、牛の人工授精や受精卵移植技術について身に付けたいと考えています。特に、人工授精では実際に直腸から手を入れて、子宮や卵巣の状態を知り、受精適期などの判断が確実にできるようにしたいと考えています。父と直腸から手を入れて実際に経験しながら勉強をしていますが、まだまだ自分1人で確認することが出来ません。自分の手で受胎率向上を目指し、1年1産が実現できるよう頑張ります。

高校卒業後は、父が卒業した岡山県にある中国四国酪農大学校に進学し、さらに酪農に必要な免許や資格を取得し、これからの酪農経営に必要な知識・技術を学びたいと思っています。

毎日の父との作業や自分の夢を実現させるために農業高校へ入学し、卒業後の進路を考えていた頃、父が最も信頼しており友人でもある酪農家の田村さんからこのようなお話をしていただきました。「牛は愛情を持って接すれば嘘をつかずに答えてくれる。自分の理想を努力次第で現実にする事ができるのも酪農の楽しさの1つでもあるはずだ」と勇気づけていただきました。

私の住む地域では田村さんを含めて酪農家が3軒しかいないため、逆に私の将来を不安にさせる現実があることも事実です。酪農家の戸数が極めて少ないため、3日に1度、自分

たちの集乳車で京都まで生乳を運び、出荷していたことがありました。但馬地域に酪農家が減少していることで、父への負担が増えていることも事実です。1人で酪農を営む父の姿を見てきて、田村さんから教えていただいた酪農にはたくさんの可能性を秘めているという希望がある半面、私に本当に出来るだろうかと不安に思うこともあります。

しかし、私は将来、父が目指した安定した収入が得られる酪農経営を目指していくために、次のことに取り組んでいきたいと考えています。1つめに、現在の成牛30頭の飼育から私が経営に携わっても成牛50頭までの規模拡大とし、1年1産の実現と誰にも負けない乳質の牛乳作りに取り組み、堅実な経営を目指していきます。決して酪農業という仕事が辛いということだけではなく、一定の収入を確実に得ることが出来るのだという魅力を伝えていくことで、地域に後継者となる若者たちが増えるきっかけ作りに貢献していきたいと思います。また、現在はほぼ100%購入飼料によって経営をしています。後継者不足から利用されていない耕作放棄地などを稲作と同時に自家栽培の牧草作りに取り組み、糞尿は堆肥化して和牛畜産農家と共に田畑に還元していく「但馬式地域循環型農業」を訴え、地域で共に助け合う酪農を目指していきます。

「最後まで諦めたらあかん」の父の言葉を信じ、但馬地域に酪農ありと言われるような活動と酪農家になりたいと思います。
